

なごや 文化 情報

2015
5・6
May / June

No. 362
NAGOYA
Cultural
Information

随想／山口 雅子（声楽家） 視点／名古屋洋舞界のあゆみ
この人と／稲舟 妙寿（小唄稲舟派二代目家元） いとしのサブカル／江尻 真奈美（シアターカフェ代表）



2015

5・6

May / June

Contents

名古屋市民文芸祭 受賞作品…………… 2

随想 歌と歩いて
山口 雅子(声楽家)…………… 3

視点 名古屋洋舞界のあゆみ…………… 4

この人と…
稲舟 妙寿(小唄稲舟派二代目家元)…………… 6

ピックアップ 名古屋市芸術創造センターで現代アート展が開催 …… 10

いとしのサブカル 江尻 真奈美(シアターカフェ代表) …… 11

おしらせ…………… 12

表紙

作品

「バスとバラ」

(2014年 / c-print / 67.6x86 cm)

私の写真には、「動かない車」が度々登場する。それらは本来の役目を終え、「もの」として物質感を露にしている。薔薇が密やかに咲く5月、私は偶然の出会いから「世界の見方」をまた一つ確定したのである。

城戸 保 (きど たもつ)

1974年 三重県生まれ
2001年 愛知県立芸術大学大学院修了

「なごや文化情報」編集委員

- 倉知外子 (現代舞踊家)
- 酒井晶代 (愛知淑徳大学メディアプロデュース学部教授)
- 田中由紀子 (美術批評/ライター)
- はせひろいち (劇作家・演出家)
- 米田真理 (朝日大学経営学部准教授)
- 渡邊 康 (椋山女学園大学教育学部准教授)

「2014年 名古屋市民文芸祭」
(第六回名古屋短詩型文学祭)小・中学生の部
短歌の部 受賞作品より ※受賞時の学校・学年で掲載しています。

◆市長賞◆

愛知教育大学附属名古屋小学校6年
彦田 栄和

楽しみは少しずつ巣が出来てきて
そこからつばめが顔を出す時

◆市会議長賞◆

名古屋市立丸の内中学校1年
鈴木 真秀

どんとんと離れてしまふ祖母の家
「また来るからね」「元気でいてね」

◆市教育委員会賞◆

名古屋市立正保小学校6年
奈良村 ひな

たのしみはポストの中にお手紙が
とどいているかたしかめる時

◆市文化振興事業団賞◆

東海市立加木屋小学校2年
富田 朱里

かたつむりゆつくりゆつくりあるいてく
はっぱのところでひとやすみました

◆名古屋短詩型文学連盟賞◆

名古屋市立若水中学校2年
朝日 麗宇

弧を描く最後のシュートはなたれる
仲間の思い全て背負って

◆中日賞◆

愛知教育大学附属名古屋小学校6年
瀬尾 尊

楽しみは朝日がまぶしい海岸で
世界の広さを感じてる時

随想

歌と歩いて



やま くち まさ こ

山口 雅子(声楽家)

国立音楽大学声楽科卒業。ソプラノ歌手として東海地方を中心に多数のオペラ、コンサートに出演。名古屋二期会副理事長、名古屋芸術大学講師。平成24年度愛知県芸術文化選奨文化賞、平成26年度名古屋市民芸術祭賞を受賞。

初めて正面から歌と向かい合えた、と自分自身で実感できたのは、25年前名古屋二期会オペラ『ラ・ボエーム』で、ムゼッタ役として舞台上に立った時でした。楽譜に示された音符と言葉の意味を正確に理解・記憶し、指揮者や演出家の厳しい指導に導かれながら、練習を重ね自分のものとし、膨大な時間をかけて少しずつ自分の役を作り上げていきます。この過程で自分自身へのこだわりや羞恥心から解放され、全く別人格の役になりきる瞬間を感じられたことは、それまでにない新鮮な経験でした。オーケストラとともに舞台上に登場する声楽家達、それを彩る衣装、照明、舞台装置など、様々な人々が繰り広げる夢の世界。それは過去に幾つかのオペラで自分が学び経験してきた一つ一つの意味をはっきりと自覚できた新たな一歩でした。それを契機に更に深くオペラの世界に引き寄せられ、次々に数多くの舞台に出演することになりました。

当時の私にとって、歌うこと即ちオペラであり、いつもオペラの楽譜と指揮者・演出家の指導が頭の中を駆け巡る毎日でした。また、その頃からコンサート歌手としても歌う機会が増え、数々のステージを経験しました。しかし、単に歌うだけの自分に何か物足りなさも感じていたことも事実です。

皆さんは往年の大バリトン歌手、立川清登氏をご存知でしょうか。私がまだ二十代前半で東京二期会

研究生の頃、立川先生のお仕事を手伝わせていただいた折、「クラシック歌手のコンサートはお勉強会みたいだと感じることもある。声楽家は歌うだけでなくもっともっと客席に向かって語りかけ、オペラや歌の楽しさを伝えられる存在になって欲しい」と仰ったことがありました。ある時、親子を対象としたコンサートの前にふとその言葉が心に浮かび、思い切っておしゃべり全開で客席に話しかけてみました。結果は大成功。お客様との歌とお話を通じてのエネルギーの交換にそれまでに無い充実感を感じることができ、以後、私のコンサートは曲間に必ずお話をを入れる形となりました。語りかけることで客席の方々と心の距離が縮まり、時と空間を共有できているという感覚が生まれてきたのです。そして、その中で歌うことが私の大きな喜びとなりました。オペラの奥深さとコンサートの楽しさ、その時期に経験したこれらの2つの出来事は、今でも私が歌と共に歩いて行くための大きな原動力です。

歌は不思議な力を持っています。オペラのアリアであれ、流行歌であれ、童謡であれ、人々の心に深く刻み込まれた歌は人が生きるために必要な《何か》が宿っていると思います。今までの年月、このような歌に囲まれて生きてこられたことに心から感謝するとともに、私なりに《何か》を伝えられるよう、もう少し歌と共に歩いてみようと思います。

名古屋洋舞界のあゆみ…

戦後70年の今年は、様々な状況を回顧したり、問い直したりと未来の指針を模索する動きが多くあるように感じられる。さて、20世紀後半には「次世紀はダンスの時代」と言われていた。現在、多種多様なダンスが往来し、教育現場ではダンスが中学校必修科目となっている。そこで、名古屋の洋舞界はどの様に発展をしてきたのか、膨大な資料の中から、身近な名古屋洋舞界を私的な見解ながらまとめてみた。(まとめ：倉知外子)

戦前の名古屋洋舞の夜明け

児童舞踊のみだった名古屋の洋舞は、昭和3年に沖縄出身の南條宏・きみ子夫妻が名古屋に舞踊研究所を開設したことにより大人対象の洋舞が始まったといえよう。2人は出身地の沖縄舞踊を柱に児童舞踊、現代舞踊、バレエなど舞踊全般を教えた。因みに宏氏は幼少より舞踊に親しみ、きみ子氏は現代舞踊を石井小浪氏（石井漢門下）に師事していた。

戦後、昭和21年 焦土からの始まり

現代舞踊の奥田敏子氏は、戦前に短期であったが、南條夫妻に師事して後に東京にて8年間、江口隆哉氏、宮操子氏に師事して終戦後、昭和21年に名古屋に研究所を開設した。そこに、現在の現代舞踊協会中部支部長、名古屋洋舞家協議会会長の関山三喜夫氏が昭和24年に入門。

バレエの佐々智恵子氏は、南條夫妻に師事して昭和21年に研究所を開設した後に、小牧正英氏に学んだ。神戸出身の越智實氏は同21年に立ち寄った名古屋で「名古屋バレエクラブ」に入会、昭和24年に「中京バレエ研究会」を主宰している。現在の日本バレエ協会中部支部長の松岡伶子氏もこのクラブに入会、「越智實バレエアカデミー」を経て、東京の「谷桃子バレエ団」にて学んだ。

南條夫妻も南條流派を拡充し、西弘美氏、吉村哲夫氏、その他が台頭してきた。現在にもその流れを汲む舞踊家は多く活躍している。その様な中で、主に横の繋がりを築いていながら、組織体制づくりと連携を深め舞踊界の発展に寄与した名古屋舞踊協会の存在があった。

合同公演の始まり

昭和23年に設立された名古屋舞踊協会による「中京芸術洋舞合同公演」が昭和25年11月に開催された。主催は名古屋舞踊協会と名古屋市教育委員会で、戦後始まった名古屋市芸術祭への参加だった。当時の名古屋で活動していた洋舞関係者のほとんどが参加するという画期的で初めての試みだった。この協会は名古屋市社会教育課の指導のもとに邦舞、洋舞がひとつにまとめられていた。初代会長は西川鯉三郎氏、副会長は奥田敏子氏だった。その後、毎年合同公演が開催された。昭和29年3月に「中部日本洋舞家協会」、「中部日本バレエ協会」が11月に設立された。更に、全国的な組織体制ができて、昭和32年に東京にて日本バレエ協会が設立され、昭和49年に社団法人化、昭和53年に中部支部その他の支部が設立さ

れて今日に至る。現在は「公益社団法人日本バレエ協会中部支部」となっている。

一方で、バレエ、現代舞踊、民族舞踊などの舞踊家で、東京にて昭和23年に結成された「日本芸術舞踊家協会」が全国組織へと気運が高まり、昭和31年に「全日本芸術舞踊協会」が石井漢氏を初代会長に再発足した。昭和33年にバレエと現代舞踊で中部ブロック結成公演が開催されたのが、中部支部の始まりであった。そして昭和47年に社団法人化され、「現代舞踊協会中部支部」となり、現在は「一般社団法人現代舞踊協会中部支部」となっている。

また、現在の名古屋洋舞家協議会は昭和62年に、前述の名古屋舞踊協会から当地にて活動する洋舞家が名古屋市と関係を持たず新たな運営体系で発足し、バレエ、現代舞踊、児童舞踊、ジャズダンス、フラメンコと垣根を越えた会員で構成されている。各協会は公演や研究会など活発に活動し、昭和の時代に礎石を築き発展を遂げている。



昭和25年「悲しきワルツ」
奥田敏子、田中耕二



昭和30年「ペトルウシュカ」
(演出・振付・主演 越智 實)



昭和33年 全日本芸術舞踊協会中部ブロック

舞台芸術に不可欠な存在

作品発表、上演になくてはならない照明家はいつごろから作品創りに関わり、舞踊界の変遷をどのように見てきたのか、昭和35年頃より裏方として始まり、照明家として活動されている松原吉晴氏、現在、洋舞公演に多く活動されている曾我裕幸氏にインタビューした。

松原氏は会社社歴71年の若尾総合舞台、その当時の若尾正也照明研究所（昭和28年設立）に昭和35年頃に、裏方としてアルバイトで入り、舞台裏のことを全てこなしていた。照明に関しては、明かりをつけるという感覚のみであったが昭和40年頃から作品創りに関わり、照明デザインをする意識が芽生え、その意識を奥田敏子氏に育てられたとのこと。また、照明器具、機械など僅かしかなく、劇場設備も今のように無い時代であった。この頃に前述のような協会が設立され、合同公演などが開催され、裏方スタッフの仕事も個人として照明家の立ち位置が明確になっていった。昭和30年代から名古屋洋舞界に関わってこられた松原氏は劇場設備などは格段に進化しているが、21世紀に入り大きな公演が減少傾向になっていると言う。

次世代の曾我裕幸氏は現在、照明家、デザイナーとして年間の仕事は洋舞公演が多いが、若尾総合舞台に入社した当初、音響希望だったが照明に配属された。その当時、名古屋市芸術創造センターなどにて様々な実験的企画があり、デザインの仕事が自由にできる人達との出会いがおもしろかったとのこと。

松原氏は「踊ること・動くことのみでなく観客が魅了される作品を創造してほしい」と名古屋の舞踊界に期待を込めて語られた。曾我氏は「幼少期の遊びが原点にあり、これから先も自由に発想し、企画され新しい何かを生み出していく舞踊家、舞踊界に惜しみなく協力をしていきたい」と、洋舞界の更なる発展、進化を期待されている。



◀平成3年
佐々智恵子バレエ団
スタジオにて



平成4年
「エンドレス・サマー夏畑」
名古屋洋舞家協議会▶
撮影：杉原隆

ジャズダンス、ヒップホップダンスなど

今、若い世代に受け容れられている熱いダンスとは、現代的なリズムの音楽によるヒップホップ系によるところが多い。この若者層がさらに身体言語に芽生えて、身体表現の奥深さに魅了されることを願う。ジャズダンス界は昭和59年に「日本ジャズダンス芸術協会」を設立しているが、名古屋のジャズダンス界は協会としての強い繋がりはないようにみうけられる。むしろ、個々のカンパニーが独自に活発に活動している。

芸術活動に厳しい社会環境

戦後から昭和50年代は文化予算がきわめて少なかった。しかし、50年代後半から経済復興へと力強い発展により、かのバブル経済で文化予算や企業からの寄付金など、補助金、助成金などによる芸術活動をバックアップされる喜びを感じたものだ。しかし、バブル期は長くは続かず、現在は文化予算が減額され、企業からの寄付も厳しくなり、再び民間、または芸術に携わる人達の経済的な自力を強くしていくしかないが、将来に向かって期待が膨らむ活動や育む状況が見えてきている。

ニューウェーブに期待!

それは平成24年に学習指導要領の改定で中学1、2年の保健体育で必修科されたことで、かつてないダンスブームが起きているといわれる。創作ダンス、フォークダンス、現代的なリズムのダンスの中から1つ以上を選ぶことができるが、舞踊教育学の専門家はバランスよく多種のダンスをした方が良いという。ともかく日常的にダンスに親しむ環境にあることを歓迎する。なごや文化情報359号「ピックアップ」の取材で男性ダンサーの人口が名古屋近郊に100人以上はいると聞いた。従来は女性の世界と思われがちだったが、ボーイズダンサーが幼少期からバレエ、ダンスを習いたいと望み、保護者も受け入れて未来の舞踊家を育てる環境になっていることに期待したい。バレエ界では、国内外のコンクール、海外留学など、女性が圧倒的だったが最近は若手男性ダンサーの活動が目され、評価されつつある。また、グローバル化するコンテンポラリーダンスには今を生きる身体感覚で表現する未知なる世界があり、魅了される人達が増えていると聞く。このような個々の表現者に負う舞踊は多様なレベルで表現して発信していく。協会という共同体で連携し存在していく舞踊界と、個人の活動で社会に存在する舞踊家と2つの流れを感じるが、共に名古屋洋舞界ならではの舞台芸術の個性豊かな進化と芸術家を育てる環境の充実を期待したい。

参考文献 「焼け跡のカーテンコール」 伊豫田静弘 著



平成25年 第35回中部バレエフェスティバル「ドン・キホーテ」 撮影：杉原一馬



平成3年「死んで花実が咲くものか 爛漫黄金」名古屋洋舞家協議会 撮影：杉原隆

この人と...



小唄稲舟派二代目家元

いな ふね たえ じゅ

稲舟 妙寿さん

広く親しめる小唄をめざして

芸どころと称される名古屋で、いま、小唄の分野の“顔”として活躍中の妙寿さん。特に、“視る小唄”をはじめ、学校での出張授業など、さまざまな普及活動で知られている。

小唄はもともと“お座敷芸”として受け継がれ、芸妓さんなど玄人のほかには、粋な風流人が習うものというイメージがある。だが、妙寿さんの流派では“学校形式”を取り入れ、敷居の高さを取り除く工夫がされているそうだ。

今回のインタビューでは、こうした、小唄を広めたいとの試みの原動力をさぐるべく、妙寿さんの足跡を中心に話を伺った。
(聞き手：米田 真理)

小唄に進むきっかけ

妙寿さんは芸事の家のお出身ではなく、小唄の道に入ったのは実に偶然の賜物だった。妙寿さんが21歳のときのこと。当時、勤めていた会社の同僚が小唄を習おうと、入門の申し込みまでしていたが、いざ稽古初日になると迷ってもじもじしている。仕方がないので付き添っていくと、その場で師匠から誘われ、自分も入門することになってしまったのだ。

思えば、子どもの頃から歌や語り物は大好きだった。特に、ラジオで天津羽衣さんの浪曲を聴くのが好きで、歌詞を聴き取っては口ずさんでいた。

さらに、物心つく前にまで遡ると、すでに三味線や小唄に慣れ親しむ環境にいた。隣の家に芸妓さんが住んでおり、幼い妙寿さんをたいへん可愛がってくれた。妙寿さんは時折、芸妓さんの家で過ごす時、小唄や三味線のお稽古をじっと見つめ、まだよく回らない口で「こんびらふねふね・・・」などを真似していたという。妙寿さん自身が全く覚えていないほど幼い日のことだが、お母さんからこのことを聞かされたとき、やはり自分は小唄が好きで、この道に向いているのだと、しみじみ感じたのだった。

師匠（先代家元）との稽古の日々

さて、師匠に入門してからの妙寿さんにとって、小唄の稽古は楽しくて仕方がなかった。2か月もたつと三味線の稽古が始まり、自宅でも時間があれば弾き唄いをし、めきめき上達していくのが嬉しかった。

その上達ぶりは、師匠から見ても目覚ましく感じられたのだろう。入門から1年半後には、師範となって教室を開くことを勧められた。昭和40年〔1965年〕のことである。師匠は、稽古場となる部屋から、机や稽古用の三味線まで用意してくれた。

妙寿さんの師匠は、後に稲舟派を興し、初代家元となった稲舟妙穂（たえほ）さんである。独立する前は山家（やまが）派に所属し、山家妙路と名乗っていた。見どころのある弟子として、妙寿さんを山家派の家元・山家玉路（たまじ）さんに紹介してくれたことから、妙寿さんは家元からも気に入られ、大きく道が開けたという。

師匠からの後押しは、さらに続く。小唄の会を訪れたNHKのプロデューサーに「あの子はプロになる子」と、妙寿さん本人に無断で売り込んでくれた。その結果、昭和41年、NHKラジオにて、邦楽の新人紹介番組への出演を果たした。



25歳のころ

以来、『邦楽のひととき』『今日の邦楽』といった同局の番組への出演が、いまも続いている。

師匠からの指導は、上級に進むにつれ厳しくなっていた。妙寿さんは、会社勤めの帰りに師匠のところに寄り、他のお弟子さんへのお茶出しなどを手伝う。その合間を縫って師匠が妙寿さんに稽古を付ける

のだが、その厳しさときたら、他のお弟子さんが同情して涙するほどであった。

だが、厳しい稽古は、期待ゆえだとわかっていた。妙寿さんは言う。「師匠からきつくあたられるのは、むしろ嬉しかったです。師匠も、自分も、互いに親子と思って慕い合っていました」。

“二足のわらじ” から、専門の師匠へ

さて、師範となり教室を開くと、妙寿さんの弟子はあつという間に十数人に達し、どんどん増えていった。会社員との二足のわらじ、それも、お弟子さんの指導と自身の稽古との両方である。次第に健康を害していく妙寿さんを見るに見かねて、小唄一本に絞るよう勧めてくれたのは、妙寿さんのお母さんだった。

実は、妙寿さんの両親は、はじめは小唄を稽古することには反対だった。もともとお座敷芸である小唄には、どうしても遊里の印象がつかまとうからだ。だが、妙寿さんの活躍や教室の順調ぶりを見て、認めてくれるようになり、自宅の一部を改装して稽古場を作ってくれた。

そうして、25歳から小唄一本に打ち込むことになり、妙寿さんの小唄への思いと活躍はますます広がっていった。

そうして妙寿さんは、師匠が昭和42年に稲舟派を興したときには20代半ばにして筆頭の弟子となっており、さらに20年後には、稲舟派の二代目を継承することになったのである。



昭和60年 師匠の稲舟妙穂さんと

“視る小唄” の成功

妙寿さんにとって、初めての大きな主催会は、昭和57年の第1回「妙寿会」だった。このとき、現在まで受け継がれることになる、大胆な演出が試された。“視る小唄”である。

“視る小唄”とは、唄と三味線で構成されるのが本来である小唄に加え、立方（たちかた）による舞踊や、照明、舞台装置、効果音などを駆使し、視覚的な情報を補うものである。現代人にとって、小唄に唄われる物語や情景を聴き取り、想像するのは難しい。そこで、せっかく舞台を観に来てくださったお客さんに、小唄の世界をもっと楽しんでもらいたいとの思いから構想されたものだった。

予想されたことではあったが、当初、“視る小唄”を疑問視する声も聞かれた。そもそも言葉にできない心情を察して楽しむのが小唄の世界ゆえ、「小唄に説明はいらない」と評されたのである。



平成24年『稲舟派45周年記念』公演「ささの縁」

だが、妙寿さんには信念があった。家元を継承してから3年目の『稲舟派25周年記念』公演（平成2年〔1991年〕、名古屋市民会館）では、日舞の花柳昌太朗さんの演出による“視る小唄”「花と華」が上演され、大好評を博した。また、次の年には、“唄とお話”“視る小唄”で構成される、名古屋初の小唄のリサイタルを催した（名古屋市芸術創造センター）。以来、“視る小唄”は妙寿さんの代名詞ともなり、リサイタルや流派の記念会などで、「縁」「旅」「万華鏡」など花柳昌太朗さん演出の作品が次々と上演されている。

“視る小唄”が評価され、妙寿さんは「平成十四年度愛知県芸術文化選奨文化賞（個人）」、さらに「平成十八年度名古屋市民芸術祭審査員特別賞」を受賞した。このことは妙寿さんにとって、その後の多彩な活動を支える原動力となった。

オリジナル作品 一親しめる小唄のために

妙寿さんは、作曲にも力を注いでいる。小唄ならではの粋でいなせな情緒はもちろんのこと、古今のさまざまな題材にもとづく作品が、妙寿さんの手によって生み出されている。

たとえば、小唄の時代をはるかに遡る題材としては、『源氏物語』を挙げることができる。このうち六曲は、平成24年の『稲舟派創立四十五周年記念小唄会』において、「人を恋う奏で」と題しナレーション付きで披露された。（余談だが、そのほとんどの作詞が、筆者の勤務する朝日大学の船越正也名誉教授（元学長、口腔生理学）によるものと今回わかった。不思議な縁を感じている。）



視る小唄「待ちわびる春」

さらに特筆すべきは、現代詩に曲を付けた作品である。特に、平成13年に発表された“童小唄”「干しダコのうた」は、子どもたちに親しまれる小唄を作りたいとの試みによるものだった。従来の小唄は男女の機微を唄っており、児童生徒に唄わせるには抵抗がある。そこで、新川和江さんの詩を小唄に仕立て、幅広い世代に受け入れられる曲を作ったのだ。

また、谷川俊太郎さんの詩に曲を付けた「誰が……」は、平成18年の『谷川俊太郎を囲む会』（うりんこ劇場）にて披露された。このとき、谷川さん本人からもらった言葉「ぼくの詩は、“日本語”だったんだね」は、妙寿さんの宝物となっている。

妙寿さんが作曲した作品は、これまで5集のCDにまとめられている。従来伝えられてきた作品同様に、新しい作品もスタンダードとして残したいという、妙寿さんの熱い思いが伝わってくるようだ。



稲舟妙寿の小唄 作品集

小唄の出張授業

妙寿さんによる小唄の普及活動は、21世紀に入ってからいっそう本格的になっていく。中でも、小・中学校からの要請に応じて三味線の指導に情熱を注いだ。

小唄の演奏は唄と三味線からなっており、稽古する人は両方を学ぶ。小唄の三味線は、狭い座敷で楽しむ芸能という性格から、撥（ばち）を用いず爪弾く奏法を用いるので、初心者でも比較的容易に音を出すことができる。そこで、特に若い世代に対しては、三味線音楽として親しんでもらうことも小唄の普及の一助になると、妙寿さんは考えていた。

折しも、平成14年に学習指導要領が改訂され、中学校で和楽器を扱うことが必修化された。また、先に紹介したように、愛知県芸術文化選奨を受賞したことも追い風となり、平成15年から小中学校の音楽の授業に講師として招かれるようになった。

生徒たちの多くが、三味線に興味を示してくれたのが嬉しかった。たとえば、名古屋市立猪高中学校（名東区）では、最初は単発の出張講義だったが、その後、選択授業として5年間講義を続けた。そのために学校は、40丁もの稽古用三味線を購入してくれた。前期の受講者は秋の文化祭で成果を発表できるので、前期に受講希望者が集中し、やむなく抽選とするほど、生徒からの人気は高かった。



平成20年 金城学院大学の留学生と

日本の文化を学ぼうとする外国人にも好評だった。お弟子さんのご縁で、年一回、金城学院大学の留学生に三味線を指導しているが、その積極性には、いつも驚かされるという。

さらには、妙寿さん自身が日本を飛び出し、出張講義を行う機会もできた。平成23年と同24年にはハワイを訪れ、ハワイ大学、ハワイパシフィック大学、プナホウ小学校、カピオラコミュニティカレッジ（短大）にて講演と体験授業を行った。青い海をバックに演奏するのは初めての経験だったが、しっくりとなじむことに驚いた。ハワイ大学 イーストウエストセンター



これが音楽の力なのだ、あらためて納得したという。

より多くの、“初めての人”に、小唄や三味線に理解と関心を持ってもらうための教育は、妙寿さんによる活動の、柱の一つとなっている。

コラボレーションへの思い

新世紀に入ってから妙寿さんの活動では、小唄と、異なる芸能とのコラボレーションが目を見張る。平成14年の東京新橋演舞場での公演「尾張芸ごよみ」では、日舞内田流の内田寿子さん、新内京派家元の新内勝知さんと共演。また、平成17年の愛知万博では、花柳磐さん主催の「名寿会」にて、長唄・小唄・新内・義太夫とのコラボレーション企画に参加した。



やっとかめ文化祭
「古典の日・邦楽名古屋舞台～邦楽散歩いまむかし～」

妙寿さんは、一昨年・昨年と行われた、名古屋市主催の「やっとかめ文化祭」の「古典の日・邦楽名古屋舞台～邦楽散歩いまむかし～」にも出演されている。さまざまな邦楽を聞き比べてもらおうという企画の趣旨に、大いに賛同されたという。

妙寿さんは語る。「小唄もそうですが、江戸時代にお稽古ごととして生まれた芸能は、国などからの補助の対象になりにくく、三味線を使う音楽や舞踊の継承者は、みんな、先細りになっていくのを心配しています。だから、みんなで協力して新しいことにも挑戦し、自分たちで盛り上げていこうとしているのです」。

その思いの結実したのが、建て替え中の御園座を応援するため結成された「御園座を盛り上げ隊・勝手連」だった。日舞の花柳流・花柳朱実さんが呼び掛け人となって、日舞や地唄舞、長唄の関係者などの名古屋を代表する実力者たちが、流儀やジャンルの枠を越えて共演するのである。妙寿さんは呼び掛けにいち早く応じ、今年三月に行われた第二回公演では、第二部の中心的な役割を果たしている。

まったく異なるジャンルとの刺激的なコラボレーションもあった。平成23年11月には、名東文化小劇場・名東区芸術文化フォーラム共同企画の音楽舞踊劇「びよんとクル

リの物語」(脚本・演出 児玉俊介)に参加。名東区在住のバレエや日舞、モダンダンス、邦楽、声楽、演劇などさまざまなジャンルの芸術家や、一般公募の合唱団員との共演を果たした。



平成23年「びよんとクルリの物語」

妙寿さんは小唄について、「こうでなければ」といった、がんじがらめなものとは考えていない。まずは、より多くの人に聴かれ、知ってもらうこと。そして、後代まで小唄を伝えられること。その目的のために、妙寿さんの試みはこれからも続く。

小唄の未来に向けて

妙寿さんが主宰する稲舟派は、平成24年に45周年を迎えた。その年の4月、その記念小唄会が、御園座にて華々しく行われた。御園座は邦楽に関わる者にとって憧れの場所なのだ、と妙寿さんは語る。

「先代の家元、つまり私の師匠が創立十周年のときに、『いつかこんな記念の会が御園座でできたらいいね』とおっしゃっていました。御園座が閉められると聞いて、それじゃあ何が何でも、と思ったのです」。妙寿さんにとって、師匠の夢を叶える舞台でもあったのだ。

本稿「この人と…」は、“ベテラン”の芸術家にお話をうかがう企画である。今回、妙寿さんの年齢をはっきりと記さなかったものの、「芸歴から、だいたいわかっちゃうじゃないの」という妙寿さんのお言葉どおり、小唄への関わりも、人生の歩みも、積み重ねられたものであることは十分察せられる。

だが、実際に向かい合ってお話を伺うと、妙寿さんの笑顔は生き活きと輝いていて、力に満ちていた。偶然飛び込んだ自分だからこそ、小唄の未来に向けてまだまだやることがある……そんな意気込みの窺われる、とても明るい笑顔だった。

ピックアップ

名古屋市芸術創造センターで現代アート展が開催

名古屋市芸術創造センター（以下、芸術創造センター）で展覧会という「芸術創造センターって劇場じゃないの?」と違和感を覚える方も少なくないだろう。そんな固定観念を打ち破り、舞台機構工事でホールが使用できない期間を活用して2月17日～3月8日に行われたのが、REN-CON ART PROJECT「連茎する現代アート」だ。

展覧会開催のきっかけは、芸術創造センター館長が「工事期間にホール以外の場所を使って展覧会ができないか」と考えたことだった。名古屋芸術大学名誉教授の庄司達さんに相談をもちかけ、話を進めていく中で、愛知県立芸術大学、名古屋芸術大学、名古屋造形大学の地元3芸大で、あいちトリエンナーレ2016に向けた「芸術大学連携プロジェクト」の一環として実施することに。当初の構想から約1年半をかけて、開催にこぎつけたという。

展覧会には、各大学を卒業した若手と教員を務める中堅のアーティスト19組が参加。劇場という空間の特性を活かした新作が目立ったが、なかでも約1000足ものトウシューズをリボンでつなぎ、階段の踊り場に吊るした荒木由香里のインスタレーション《Curtain of swans》は圧巻だった。バレリーナから履き潰したトウシューズを提供しても



荒木由香里《Curtain of swans》
(2015年)

らい、それらを隙間なくつなげた作品は、飛び疲れた鳥の翼を彷彿させた。そしてそこには、1983年の開館以来、多くの舞台人を輩出してきたこの劇場に蓄積された記憶の数々が宿っているようだった。

また「箱馬」と呼ばれる、舞台の床面の高さ調



「箱馬」を展示台に使用したキュービクミュージアムの作品群

整などに使われる木箱を並べて展示台にしたキュービクミュージアムの作品群や、ブルーシートを発泡インダーで型取りしたものを備品類に覆い被せて、あたかも舞台裏から運び出してきたかのように設置した阿部大介の《Untitled・Blue Sheet》には、公演時に実際に使われている道具や備品が利用されており、劇場ならではの展示となっていた。



阿部大介《Untitled・Blue Sheet》
(2015年)

さらに、六角形をいくつも組み合わせたような建物の特徴を浮かび上がらせる作品もあった。階段の手すりに沿って張ったピアノ線上にピンポン玉を移動させる、アートユニット道楽同盟による《みちし

るべ》(2015年)は、ピンポン玉が120度の角度で手すりを曲がるのを鑑賞者が目で追うことによって、内部も六角形の組み合わせによる構造であることを体感させる作品だった。

今回の試みは、若手アーティストにとって展示とはほぼ縁のない劇場という場所へアプローチする機会となったばかりでなく、劇場空間そのものの可能性を再考する試みとして、今後の芸術創造センターの活用を幅を広げるきっかけとなるのではないだろうか。(T)

撮影／城戸保

いとしの サブカル

みんなで仲良く映画を見て ちょっとだけ気付いて欲しいこと。

シアターカフェ代表

江尻 真奈美 (えじり まなみ)

普通の映画好き OL から転身、「あいち国際女性映画祭」スタッフ、ミニシアター、シネマスコールのスタッフを経て 2012 年短編映画やアニメーションを上映する空間 シアターカフェを林緑子と共同運営。

まだ「腐女子」という言葉が存在もしなかった80年代半ば、『アナザー・カントリー』『モーリス』といった英国美少年寄宿舎もの、の映画にずっぴりハマりました。もともと少女漫画では萩尾望都や竹宮恵子(あ、年齢バれますね!)の熱烈なファンだったので、当然のごとく、同性愛を描く作品は好んで見ていました。それは自分の中では当然のことだったし、いわゆるゲイ映画は、記憶に新しいところでは『チョコレートドーナツ』など“名作”と言われる作品が多いと思うのは、鼻真目でしょうか。そんなふうに何も考えずにただ単に好きなゲイ映画をみてきた私ですが、2012年にシアターカフェを大須にオープンしてから、少し考えることができました。大須という場所から、いろいろな人たちが出入りする場所ではあるけど、店にきてくれた女装子さんがやたら気兼ねをするんです。「私なんか来てもいいの?」と。「私なんか」っていうのはどういう意味なんだろう?自分で好きな女装をしても、周りにそんなに気を遣わねばならないのか?と。人生をほぼ映画館で過ごしてきたので、実際に悩んでいる方が身近にはいなかったということですね。私はいろいろな趣向の人がいて当たり前だと

思っているし、誰でも好きな格好で好きなところへ出かけるのは当然だと思っていて、それが女装であろうとコスプレであろうと個人の自由だと思っています。なので、彼女が悩んでいることには驚いたし、もしかしてほかの人たちは私とは違う考えを持っている人も多いのかも、と今更ながら思いました。そこで、自分のできることといたら映画しかないし、映画を通じて誰でも自由に、誰にも気兼ねなく生きていけるような社会になればいいなあ、という想いだけで、映画祭を立ち上げると決心しました。いわゆる LGBT(レズビアン、ゲイ、バイセクシャル、トランスジェンダー)系の映画祭は東京をはじめさまざまな都市で開催されていますが、名古屋にはまだないし、もともとゲイ映画が好きだし、という本当に単純すぎる考えです。多分当事者の人たちから見れば、誰に向けてやっているかわからない、と言われるかもしれないのは承知で、最初は当事者より、その周りの人たちが映画を見ることによって、少しでも気づいてくれればという想いで小さな一歩を踏み出します。「大須にじいろ映画祭」は5/23.24の2日間開催予定です。日本初公開の中国作品(レズビアン)、愛知県初のスウェーデン作品(ゲイ)、浜野佐知監督のトランスジェンダー映画、ウガンダのゲイ迫害のドキュメンタリーとバランスよく上映作品は揃いました。公募した短編作品も上映します。まずは気軽に映画を見に来る、ということから始めて、見たあと何か感じてもらえれば、そして周りにもかもしれない人たちが自由に生きられるように見守ってくれる気持ちをもってもらえたら、と思っています。もちろん当事者の方も歓迎です。たけしのTVタックルでも今年「女装子は来る!」と言われましたし、みんなで仲良く映画を楽しみましょう。それが第一歩となれば嬉しいのです。



日本初公開の中国映画 Sweet Eighteen

名古屋市文化基金事業

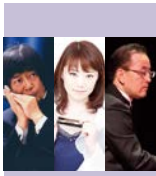
文化小劇場 芸術三昧!シリーズ

7月

チケットは、好評販売中です。

名古屋市の文化小劇場を会場としてお届けするシリーズ公演が始まります。7月はバラエティーに富んだ4公演をお楽しみください。

齋藤寿孝・柳川優子が贈る ハーモニカで綴る思い出ほろり♪コンサート



日時
7月2日(木) 18:45 (18:15開場)

会場
熱田文化小劇場
TEL 052-682-0222

料金 <全指定席>
一般2,000円 学生1,500円
※未就学児の入場はご遠慮ください。

ポイント 261-324
心に残るあのメロディーをハーモニカで聴いてみませんか?
第1部は全日本ハーモニカ連盟理事長の齋藤寿孝とともに「青い山脈」など昭和歌謡の歴史を振り返ります。
第2部は複音ハーモニカの名プレイヤー柳川優子と、ピアニスト高橋明治とのデュオをお楽しみください。

古謝美佐子 沖縄のこころのうた



日時
7月4日(土) 15:00 (14:30開場)

会場
中村文化小劇場 TEL 052-411-4565

料金 <全指定席>
一般2,800円
中学生以下 1,800円
※未就学児も鑑賞できます。3歳以上有料。但し、3歳未満のお子様もお席が必要な場合は有料。

出演
古謝美佐子(歌・三線)
佐原一哉(キーボード・構成)

ポイント 258-987
沖縄民謡歌手であり、沖縄ポップグループ「ネーネーズ」の初代リーダーの古謝美佐子。沖縄の人の温かさを感じさせる伝統的な民謡や、オリジナル曲を三線とともに演唱します。

山崎あおい & 見田村千晴 GUITAR GIRL SPECIAL



日時
7月9日(木) 19:00 (18:30開場)

会場
千種文化小劇場
TEL 052-745-6235

料金 <全指定席>
一般2,800円 学生1,800円
※未就学児の入場はご遠慮ください。

ポイント 260-849
リアリティのある歌詞が同世代の男女に圧倒的な支持を受けている現役大学生シンガーソングライター山崎あおい。正直で温度のある希望に満ちた詩の世界観が、同世代の女性を中心に話題を呼ぶ岐阜出身のシンガーソングライター・見田村千晴。そんなふたりが一夜限り?のスペシャルライブを開催します。

上野星矢フルートリサイタル



日時
7月16日(木) 18:45 (18:15開場)

会場
名東文化小劇場 TEL 052-726-0008

料金 <全指定席>
一般2,500円 学生1,500円
※未就学児の入場はご遠慮ください。

ポイント 258-990
フランスで開催される「ジャン＝ピエール・ランバル国際フルートコンクール」の第8回覇者で、圧倒的な技術と音楽性を併せ持つ次世代のフルーティスト、上野星矢のおしゃれなフルートリサイタル。「牧神の午後への前奏曲」(C.ドビュッシー)、「川の流れるように」(美空ひばり)など、クラシックからポップスまで幅広くお楽しみいただけます。

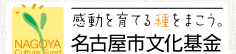
チケット
取扱い

●名古屋市文化振興事業団チケットガイド TEL 052-249-9387 (平日9:00~17:00/郵送可)

※事業団友の会会員は1割引(一般のみ/事業団チケットガイドと事業団が管理運営する施設窓口での前売り扱いのみ)
※市内13文化小劇場(瑞穂文化小劇場を除く)、市民会館、芸術創造センター、青少年文化センター、名古屋能楽堂ほか事業団が管理する文化施設窓口(土日祝日も営業)でもお求めいただけます。

●チケットぴあ TEL 0570-02-9999

※サークルK・サンクス、セブンイレブン、中日新聞販売店でも直接お求めいただけます。チケットぴあでは手数料等が必要になります。



感動を育てる種をまこう。
名古屋市文化基金

主催



公益財団法人
名古屋市文化振興事業団

公演に関するお問い合わせは名古屋市文化振興事業団チケットガイドまで

一味違う印刷をお探しのあなた!
箔印刷は押してましたが、今は
箔がつつくんです!!
(コールドフォイル印刷)

鬼頭印刷株式会社

Tel.052-681-1701 Fax.052-679-1171
data@kito-net.com www.kito-net.com
〒456-0073 名古屋市熱田区千代田町3-22

- コールドフォイル印刷
- フォログラム転写印刷
- UVオフセット印刷
- バリアブル(可変データ)印刷
- オフセット印刷
- Mac、Win、DTPデータ作成
- B倍プロッター出力

We make you move

舞台音響/映像設備 機器販売・設計・施工・保守・特注品製作
株式会社エーアンドブイ
〒464-0846 愛知県名古屋市千種区城木町二丁目98
TEL 052-761-5400 FAX 052-761-0909

舞台映像専科

ステージの感動を格調高い映像で追求します。
ハイビジョンで撮影し
ブルーレイディスクでお渡しします。



ビデオソフトの企画制作

有限会社 エーワン・ビデオ・システム
TEL(052)896-2256 FAX(052)896-4100

「ナゴヤ劇場ジャーナル」ではサポート会員を募集しています。

ナゴヤ劇場ジャーナル

◎年間6,480円で毎月お手元にお届けいたします。
◎毎月24,000部発行 ※東海地方の演劇・パレエ・音楽公演、各所顧客DM、他に配布

MP MANAGEMENT PRO 株式会社マネージメント・プロ

〒464-0850 愛知県名古屋市千種区今池1-14-11 CASA LUZ302
TEL (052) 735-3151 FAX (052) 735-3152 E-mail: mpoffice@pa2.so-net.ne.jp

業務内容

- ①舞台の企画・制作マネージメント
- ②イベントの企画制作
- ③芸術団体のコンサルティング
- ④舞台・イベントの運営